

相模鉄道高架下活用案



相馬健人 建築設計計画研究室



コンセプト

現在、相模鉄道では踏切遮断による交通渋滞の緩和目的として、天王町駅から星川駅付近までの鉄道の高架化工事を行っている。町を分断していた鉄道が高架化することで地域の一体化が図れる。約10mの高さを持ち、長く伸びる。道高架はベッドタウンである町にとって存在感のある構造物となってしまう。だが、この高架下を活用することで地域のコミュニティが生まれるランドマークの役割を持つ場所になるのではと考える。

プログラム

大きく2つのブロックに分かれており、異なるコミュニティを生み出す。東側は地域住民の集まる場として、子育て支援施設に集会所を設ける他、近隣を流れる帷子川を楽しむことが出来る。西側は隣接した小学校の学童保育施設を中心として子供のための学びと遊びを目的とした場所となっており、自然を楽しむことのできるピオトープに、保土ヶ谷公会堂内にある図書館に接続する児童書や雑誌を取り扱う別館を設ける。



デザイン

川沿いには帷子川の景観を活かすように高低差を持たせた建物や遊歩道をつくり、近隣住民にとっての憩いの場とする。また敷地には水遊びの行える川を作る他、芝や樹木を置く事で触れ合い辛くなった自然を楽しめる。高架の柱は場所ごとに芝や鏡を貼り、コンクリートの巨大な人工物の姿を隠す。これにより鉄道高架とその柱、そしてその下に広がる空間はその地域におけるランドマークとして存在する。

